

4. 環境の観念史 — 環境と家政学 —

小 林 信 一 (東京工業大学)

1. 環境観の三相

環境という概念には、1) 周りを取り囲むもの、2) 人間や生物の生存や成長に影響を与えるもの、3) 人間が生活する上で保全すべき自然の総体、といった異なる3つの意味がある。

第1の環境は、それ自体特定の価値を反映しない中立的な概念である。第2の環境は、自然的環境のみならず、社会的環境、文化的環境なども含む。さまざまな領域で環境論（環境決定論）を生み出した環境観であり、いわば機能的概念といえる。第1、第2の環境観の段階では、環境を指す語はどの言語にもそれぞれの形で存在する。外形は異なるものの、環境を指す語が「周り＋取り囲むもの」という複合語として成り立っていることは各言語に共通である。environment, milieu, Umgebung, そして「環境」も、そのような成り立ちを持つ語である。環境に対応する概念はギリシア時代にもあり、同様の成り立ちをしている。また、ギリシア時代にはすでに、植物や人間の成長に影響を与えるものという第2の意味でも使われていた。環境のこの観念はギリシア以来今日まで主流である。

第2と第3の環境観の差異は、一見明らかではない。例えば、地球規模環境問題というときに、環境を「人間や生物の生存に影響を与えるもの」と解しても意味は通じる。また、「環境にやさしい」というときには、第1もしくは第2の意味と解してもよいと思われる。第2と第3の環境観の違いは、environmentalism を取上げれば理解しやすい。

元来この語は環境決定論を指す概念で、第2の環境観に対応していた。しかし、今日では環境保護主義といった意味で用いられる。すなわち第3の環境観は、人間が自然をどのようなものとするか、いわば自然観を表現するものである。第2と第3の環境観の最大の相違点は、第3の環境観が著しく価値的または倫理的である点にある。

環境は第3の意味で用いるのは比較的新しいことであると考えられる。第3の環境観は、1960年代以降の環境汚染問題(公害問題)を契機に登場し、1970年以降確立したとみるのが妥当であろう(このことは、QEDにおけるenvironment, environmentalismなどの項の変遷や、学術論文等の文献資料における用法の変遷を調べれば容易に知ることができる。) また、第3の意味においては、environment が各国語の中でそのまま用いられるという特徴がみられる。このことも、第1、第2の環境観との相違点である。

今日、環境が問題とされるのは第3の意味においてである。本稿では、第3の環境観を軸に、主として西欧において、人間と自然の関わりについてどのような捉えられ方をしてきたか、その基礎となるスチュワードシップの思想はいかなるものか、さらにそれらと家政学とはどのような関係にあるのか、を論じたい。

2. スチュワードシップと環境観

第3の環境観の成立は、キリスト教、とくにカルビニズムの自然観に負っている。本節

では、第3の環境観の背後にあるカルビニズムの自然観について簡単に示す。

2.1. 人文主義からマニエリスムへ

後の議論に関連するので、ギリシア時代の自然観についても簡単に触れておこう。

ギリシアの人文主義は、神の支配もしくは神話からの解放を趣旨とする人間中心主義である。これは2つのシステムに具現される。1つは政治システムの発明であり、ポリスという人治のシステムに具現される。civilization(文明)はこのような文脈を持つ概念である。もう1つは経済システムの発明であり、人間の自然を利用した営み(人為, 人工)としてのオイコスである。culture(耕作=文化)はこのような文脈を持つ。オイコスは、我々が問題とする第3の環境の観念と同様に、人間の営みとそれを取囲むものとの関係のあり方を表現している。ただし、この時代の自然観は人間中心主義的である。

ギリシア人文主義を手本としたルネサンスの人文主義も、きわめて人間中心的な性格を持つ。これは、芸術の分野のみならず、科学の分野にもあてはまる。しかし、そのような状態が続いたのではなく、それに続く宗教改革を契機として、人間の営みを神との関係のもとに捉え直すことになった。

この時代はマニエリスムの時代でもあり、人間と神との関係が非常に不安定な時代であった。「きれいは穢ない、穢ないはきれいい」、「生か、死か、それが疑問だ」など、シェイクスピアの戯曲には典型的なマニエリスムの雰囲気がある。フランシス・ベーコンも同時代の哲学者であり、マニエリスムの雰囲気が満ちている。

このような時代を経たのち、時代はバロックへと移っていく。ルネサンスで謳歌された人間中心主義は、バロックに至り、明確な宇宙中心主義にとって代わられる。

2.2. クリスチャン・スチュワードシップ

マニエリスムの時代における神と人間の関係の変化は、自然に対する見方にも影響を与えた。すなわち、「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のもの」であり、「地は人の子らに与えられた」ものである(詩篇)から、自然は、神との関係において意味付けられる。この点が、カルビニズム、あるいはより一般的にプロテスタンティズムにおいて、強く意識されることになったのである。

すなわち、カルビニズムにおける神・人間・自然の相互関係の捉え方は、クリスチャン・スチュワードシップという言葉で表わされる。stewardshipとは、給仕、執事、家令などの職務を指す英語であるが、キリスト教の文脈では特別の意味を持つ。すなわち、「自然は人間の所有物ではなく、管理しているものに過ぎない、自然は神の意志に従って、未来の人類を含め、万人のために活用されるべきである、主体的に保全されるべきものである」といった考え方がスチュワードシップの自然観、環境観である。

クリスチャン・スチュワードシップは、マックスウェーバー流の議論によって明快に理解できるかもしれない。カルビニズムにおいては、自然の利用から得られる果実、すなわち富もクリスチャン・スチュワードシップの原則に従って扱われるべきだとする。カルビニズムが主張するところは、正当に得られた富は悪いものでなく、神の意志に従って活用されなければならない、ということである。神の意志に従って富を処理するとは、万人の福利の向上のために用いることである。そして、この倫理観が資本主義の基盤を与えたというのがマックスウェーバーの議論である。

F・ベーコンの思想にも、カルビニズムは多大の影響を与えた。彼は、人間の営みのた

めに自然を利用すべきだと唱えたため、環境破壊の元祖のように誤解されるが、彼の思想の根底にあるのは、カルビニズムで強調されたクリスチャン・スチュワードシップである。自然は神から人間に委ねられたものであるから、人間は神の意図に沿って自然を利用してよいことになる。そのために科学技術を振興しようというのがベーコン主義である。

このような宗教的倫理基盤を持つ環境観が、そのまま現在まで伝えられたとみるのは早計であろう。カルビニズムの宗教的倫理観は同時に、経済において資本主義、科学において合理的精神をも育んだ。それらが優勢になると、スチュワードシップに基づく自然観は、自然は人間の繁栄のために存在するものである、などといった自然支配思想へと転化した。いわば、倫理の喪失である。しかし、その行き着いたところは環境破壊であり、今日にいたってスチュワードシップの倫理的環境観の回復の兆しがみられるのである。歴史的には、このような紆余曲折を経たと捉える方が公平であろう。

第3の環境観は、無前提に自然を守ろうという単純なロマン主義ではなく、このようなクリスチャン・スチュワードシップの背景を持っている。昨今の地球規模環境問題に関する議論では、欧米では公式な場においても、スチュワードシップという言葉が登場する。彼らは、環境問題を自然と経済という単純なダイコトミーでのみ議論しているわけではなく、倫理的観点からも議論していることに、われわれは留意する必要がある。

3. スチュワードシップと家政学

3.1. オイコス、エコノミー、スチュワードシップ

スチュワードシップに基づく環境観が、直接的には宗教的契機を有するとはいえ、そのエッセンスは必ずしも宗教に制約されない

と思われる。この点を理解するためには、スチュワードシップという言葉についてさらに吟味する必要がある。

スチュワードシップという英語は、実はギリシア語オイコノモスの意識である。オイコノモスは家を意味するオイコスから派生した言葉で、家の規範という原義になる。オイコノモスはギリシア語の聖書に頻繁に現れるが、これを英訳（宗教改革期に聖書は各国語に翻訳された）する際に当てた言葉が、economyではなく、stewardshipなのである。

前述のように、スチュワードシップとは、給仕、執事、家令、支配人などを意味することばである。一方、オイコノモスはもともと家の管理、財産の管理などを指す言葉であり、両者には隔たりがあるようにも思える。しかし、ギリシア時代の家とは、いわば荘園であり、そこで働く人々をも含む概念であった。だから、王の執事、官房や、封建領主の「管理」の役割を、オイコスと表現することは不自然ではない。聖書の中のオイコスは、家の管理であったり、宮殿の管理、宮廷、官房の仕事であったりする。これらを指すオイコノモスをスチュワードシップで置き換えることは自然である。

一方、いうまでもなく、オイコノモスはエコノミーの語源である。エコノミーはオイコノモスの外形を継ぎ、スチュワードシップはその中身を継いでいる語ということになる。また、エコノミックス（オイコノミカ）は、ギリシア時代からの学問で、当時は家の管理、財産の管理を扱った。経済活動のほとんどが家計部門の中に限られていたからである。だからオイコノミカは家政学と訳される。したがって、オイコノモスは、外部化された経済を中心とするエコノミー、家の中の経済を中心とする家政学、およびスチュワードシップの3つの流れに分かれたといえることができる。

なお、オイコス+ロゴスとしてのエコロジーが、今日の環境問題に多大な影響を与えていることはいうまでもない。このように、環境問題を議論する際の主要な言葉がすべてオイコス=家に連なっている。

3.2. 家のメタファー

聖書のスチュワードシップが、実はオイコノモスという言葉で語られていたことに留意する必要がある。環境保全主義としての環境観はクリスチャン・スチュワードシップの原理に基づくが、それは同時にオイコノモス=家政の原理でもある。

オイコスは、家という、個と全体の不可分の関係を表現している。そのメンバーたる個人の主体性は、物理的な意味での人間の範囲を越えたものとなる。家が非難されるのも家のそうした特性によるのだし、家、家庭、家政などの隠喩的意味は、主体性が個人の範囲を越えるところにある。聖書がオイコノモスまたはスチュワードシップという言葉で、神と人間と自然の関係を表現するとき、そこには家の隠喩がある。つまり、神を中心とする家としての宇宙観である。

しかし、宇宙=家の管理、運営は、支配でもなければ、神の指示に機械的に従うことでもない。オイコノモス=スチュワードシップは単なる管理ではなく、全体的かつ主体的な管理である。スチュワードは、あくまでも自らの意志で主体的に動くが、同時に主人=神の利益にも配慮し、主人の意志の実現を図るものである。家の管理は、抑圧的支配ではなく、利他的、博愛的管理なのである。

結局、オイコノモスの意味のうちで、全体性の中で主体的に環境に対峙するという意味を伝えているのが、スチュワードシップなのである。環境問題を環境と経済のダイコトミーとして捉えるのとは異なり、今日の環境問題の有機的性格に合致する言葉である。も

っとも、英語の economy には有機的全体といったスチュワードシップの観念に近い意味が残っている。だが日本語で「経済」というときには、有機的全体を主体的に管理していくという意味はほとんど捨象されている。

日本語には、経済や生態という言葉はあるが、スチュワードシップに対応する言葉はない。そうした中で、家政学は家という全体性の中で主体的な営為を考える学問であり、スチュワードシップの考え方を最もよく伝えているはずの学問である。地球規模環境問題では、家は地球のメタファーである。地球家政学（村上陽一郎、地球家政の提唱、固体物理、Vol. 25, No. 7, 1990 など）が提唱されているのもこうした文脈からだと思われる。

4. 家政学と環境問題

家政学が環境問題と関わる仕方には、河川の汚染の最大の原因が生活廃水であるとか、家計部門が最終エネルギー消費の最大の部門である、といった点に着目するとか、環境負荷は生活する人間にかかってくるのであるとか、そのような観点から関わる仕方があるだろう。人間と自然の相互負荷の研究の学としての家政学である。しかし、これは旧来の環境パラダイム、第2の環境観の反映であり、それ自体環境破壊の裏返しでしかない。

家政学に求められているのは、第3の環境観つまり環境保全の指導原理を提供する学問としての家政学である。これまでみてきたように、家政学にはそのような原理が内在すると期待できる。現実の家政学は家の全体性ゆえに非難され、敬遠されてきた。しかも、実態はかなり還元論的である。だが、家政学本来の全体論的視点は環境問題に取り組む上でも有効なはずである。